



— 卷頭言 —

核医学を友として—雑感—

中 村 幸 夫

本学会も任意団体から一昨年非営利団体法人化となり社会に船出をした。「日本核医学技術学会」と公に標榜することが可能となった。これは社会に対する責務を負うことを意味する。我々は「核医学技術」をより探求し社会に貢献しなければならない。このためにも核医学専門医とともに核医学専門技師の数も多く増やして行かなければならない。

以前より言われているように核医学の発展は核医学技術、放射性医薬品の開発、検査装置の開発の三位一体となり発展してきた。核医学の現状と今後を独断と偏見で触れてみたい。近年、「がんの早期発見」を受けて FDG-PET が注目され PET/CT の導入を受けて飛躍的にこの分野が発展した。この発展は我々核医学に携わる関係者の努力（保険適応）以外に社会情勢、商業ベースに乗せた外部資本の導入などの後押しを受けたことにある。一方、PET 以外の核医学診断装置を見てみるとわが国が開発した多検出器型ガンマカメラなどは優れた性能を有しているにも関わらず事業の縮小などで「独自開発」から撤退をしまい寂しい限りである。これには海外との貿易摩擦解消の一貫（国策）として外国製品の購入方針などにも起因しているのではないだろうか？装置の新規購入や更新時には以前と比べて選択肢が限られているように感じる。半導体検出器カメラの普及も待たれて久しい。この中で SPECT/CT の導入は画像診断に大いに役立っている。CT 画像との fusion 画像は形態画像と生理・代謝画像との融合であり核医学画像の分解能の低さを補うもので一步も二歩も踏み込んだ局在診断を可能とした。このことは核医学診断医のモチベーションが上がるとともに検査依頼側にとっては検査に対する期待度、信頼度が増すことは核医学の今後に明るい展望となる。

放射性医薬品では Sr-89, Y-90 による RI 内用療法が実施可能となった。また、PET では FDG の欠点（炎症部位への集積）を補う医薬品の研究開発が行われている。ただ、一般核医学において新たな診断薬の開発・提供がないことは残念である。

核医学に携わる者すべてがハッピーになるためには医療技術、検査機器、放射性医薬品関係の三分野が核医学チームとしてスクラムを組んで前進しなければならない。